西田 誠 先生
Professor Dr. Makoto Nishida（1927–1998）



1997年，マダガスカル・ムルンダバにて.
At Morondava, Madagascar, 1997.

西田誠先生は1998年11月18日，肺原発生悪性繊維性組織球腫のため逝去されました．享年71才でした．慎んで御冥福をお祈りいたします．

改めて御経歴を拝見しますと，先生は1927年に足利市生まれで，足利中学卒業後，旧制の松本高等学校に進まれました．松本時代の交友をどんなに大事にされてたかも，幾つかの著書から伺うことができます．植物のかたちに惹かれて，1958年東京帝国大学に入学されて，小倉謙教授の研究室に所属されましたが，その頃華やかにかたちを論じられていた若き日の前川文夫先生に強い感化を受けられたことは御本人が終生公言して憚られぬことでした．1961年，大学卒業後すぐに千葉大学理学部助手となり，1992年3月に定年退官されるまで31年間にわたって千葉大学で研究，教育に専念されました．その間，1964年から71年まで，千葉大学に置かれた留学生部に所属され，外国人留学生の教育にも大きな足跡を残されました．千葉大学退官後は(財)進化生物学研究所で研究を続けられ，近藤前所長が亡くなられた後は所長として研究所の運営に貢献されておりました．

西田先生ははじめハナヤスリ目の比較形態学を研究課題とされ，担葉体の維管束走行の解析から葉と胞子嚢穂の系統発生を追跡する研究に成果をあげられました．その後，研究の中心を化石植物の調査と同定に移し，千葉県で採集された材料を手始めに，裸子植物をはじめさまざまな植物化石の研究に成果をあげられました．1968年に東京大学の南米植物研究に参加されて以来，数度にわたる南米での現地調査を実施されましたが，その後半は専ら自らが組織する調査でした．また，進化生物学研究所へ移られてからは，研究所の中心的課題の一つであるマダガスカルの調査を組織され，亡くなる直前まで，その研究に情熱を注いでおられました．

シダ植物を研究対象としておられた若い頃に，琉球で採集された資料を，京都大学の田川基二先生のところへ持ち込まれ，同定の指導を受けられたことが，当時まだ学部学生だった私との最初の出合いでした．その後，40年をこえる長い期間，私は西田先生と先輩後輩のおつき合いをさせていただきました．

西田先生は一貫して植物のかたちに対する科学的好奇心をもち続け，かたちの不思議を解くことに生涯を賭けられました．その間，留学生部の諸々の用務や，千葉大学学生部長，進化生物学研究所長などの管理職も歴任されましたが，管理業務に忙殺されている間も，植物学からは目をそらすことなく，だから生涯論文の途絶える時のない研究者生活を送られました．営々として築きあげられた業績の山に，優れた植物学研究者の生き様が遺されております．

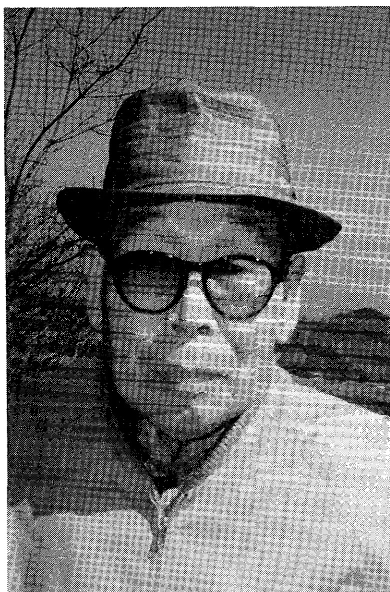
研究論文の他に，日本語の啓蒙書も幾つかものされております．日本で生物多様性の研究が一番やせ細っていた頃に，西田先生の書物を読んで研究の意味を発見し，確認した人たちも少なくなかったはずです．

西田先生といえば，その率直で，奔放とも言える言動が特性です．私も，それでヒヤヒ

ヤしたことが何度かなかったとは言えませんが，いつでも植物学の前途を見つめながら真の善意から迸り出たその言葉に，一旦は辟易しても，いずれは心からの協調を覚えたというのが多くの人の経験だったのではないでしょうか．口が悪いと零しながら，西田先生のことを悪し様にいう人がないのはそのことをよく物語る事実です．

平均年齢が高くなった日本の今日では，まだまだ慌てて冥界へ旅立つという年令ではなかったのですが，2人の息子たちも植物学者として大成の見通しをもち，多様性の生物学がそれなりに発展の兆しを見せるようになった今，俺はあっちでお前たちがちゃんとやるかどうか見てるからな，とおっしゃっているのが見えるようなお別れだったような気がすることです．（岩槻邦男）

奥山春季さん追悼
Mr. Shunki Okuyama（1909–1998）



Mr. Shunki Okuyama (1909–1998)

山形県東根町（現，東根市）で1909年1月1日に生まれられた．野草が好きで，千葉高等園芸（現，千葉大学園芸学部）を卒業し，1932年東京科学博物館（現，国立科学博物館）に入った．当時は高等植物関係はお年を召した根本莞爾氏のみであったが，氏の加入で館はにわかに若返った．しばしば野外の植物採集会を牧野富太郎先生，久内清孝先生の助力で行い，1974年退官するまで，年間20回を超える採集会を行ったことが10ヶ年もあった．このため参加する会員も増し，館の標本も充実した．しばしば一般会員の自慢の「おし葉展」を開き，これは科博の大切な年中行事となり，退職までに35回を数えた．これが全国のアマチュアのレベルを高めた効果は，はかり知れない．

研究発表は「ヒメミソハギ男鹿半島に産す」（自然科学と博物館，1933年）が初めで，その後，植物研究雑誌（以下植研と略）10巻（1934年）にイノコズチ属の研究を二編発表した．これは大変念の入った論文で，今でもむづかしい属であるが入念に仕上げてある．その後植研にいろいろ研究ノートを出したが，「日本産植物雑記」1～7（1936－1943年）は本格的な評論を展開している．ここでは回を重ねるに従って広範な科に触れるようになった．しかし私がひそかに考えるところでは，この論文の後の方では，氏はいささか息を切らしているらしい様子が感じられる．研究対象をしぼる必要が生じたのであろう．氏の最終目的は後で紹介するように，日本の各地域の小フロラをまとめて一書にすることではなかったかと想像する．その手始めが「植物採集覚書1」（植研21巻，1947年）で，この連作は同33（植研47巻，1972年）まで続き，25年間に亘る労作にピリオドを打つに到る．この連作と少し重複して「植物採集ニュース」（第1号，1962年）なる薄いパンフレットが不定期に発行されはじめ，1974年国立科学博物館の退官を経て，1978年第100